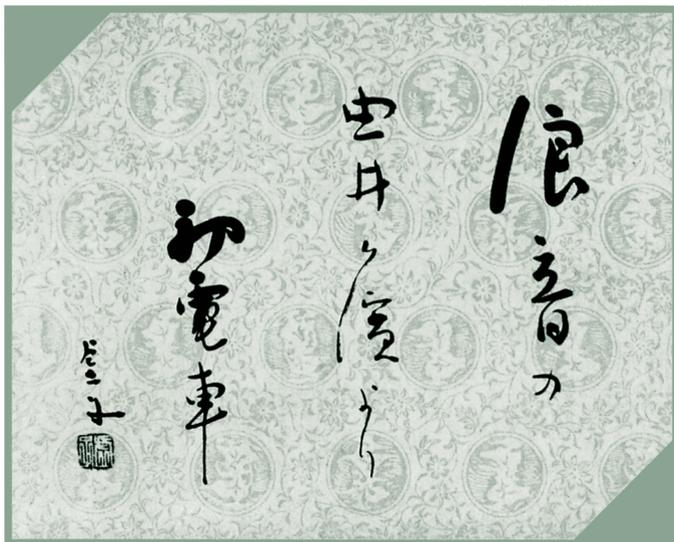


詠 詠 集 方

十二月号



花鳥諷詠[®]

令和2年12月 ■ 第393号 ————— 目次



花鳥諷詠選集	稲畑 汀子 2
	田中 静龍 4
第三十一回全国俳句大会	7
虚子研究 『六百五十句』 研究 (12)	12
虚子研究 虚子宛書簡を読む (十七)	
明治二十四年六月七日碧梧桐書簡(封書) 前編	椋 誠一郎17
一頁の鑑賞	池田雅かず22
	吉田 有子23
この人の作品	肥塚 英子24
風報	25
カレンダーこぼれ話③	27
青年部の企て 私の考える伝統俳句 (一)	進藤 剛至28
新刊紹介	30
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

退院の夫を迎ふる稲の波

長岡笠原 佐千子

手花火の親より太くなりたる手

宗像井上 眞知子

台風の来るとは信じられぬ空

鹿児島青野 優子

子らの目の涼し見たがり聞きたがり

阿南湯浅 芙美

独りとは自由で孤独夜の長し

飯塚馬場 美智子

二句短評

一句目——夫が病んで入院していたのは、田植の頃だったのかも知れない。入院している夫に代わって妻の作者は、一生懸命に田んぼを護り育てて来た。いよいよ病が癒えて退院する夫が帰ってくる。ふさふさと豊かに稔った田んぼと共に迎える妻の心の推移が想像される。二句目——日が暮れて家族で楽しむ手花火であるう。花火を囲んで暗闇に照らし出された子供とは言えない手の大きさに驚く。こんな時にしか見られない子供の子供の成長に驚く親子の雰囲気を描けた。

入選六十句

一人居て二人と思ふ夜長の灯

金沢 中村 曜子

花火果て宇宙の闇の深まりぬ

東京 安出 文子

稲妻に逃げるすべなき山歩き

姫路 黒田千賀子

きつぱりと九月の風となつてをり

福島 今野 成子

草叢に見えぬもの見し秋の風

柏 曾我部晚成子

木槿散るみんな同じで別別に

堺 徳澤 彰子

一軸は虚子の酔筆夏座敷

相模原 木村 享史

毛虫嫌美しき翅現るるとも

札幌 押野 美江

寝惜しみてゐるははがりの星月夜

香川 福家 市子

稲妻の山湖の闇を裂きにけり

吹田 堂前 悦子

秋暑しだらだら過す日曜日

久留米 橋本百合子

緑蔭に来て句心を取り戻す

筑紫野 多田 蒼生

訪へば先づ犬の出て来る昼寝時

福山 佐藤三重子

椿子を重ね偲びし秋の草

神戸 平田 恵

亡き夫と焚きし庭先門火焚く

高松 金沢 正恵

新しき句帳したため子規忌かな 香川 中村 文子
 水打つて変はらぬ一と日終りけり 米子 遠藤 裕子
 吊橋を行く新涼の風に揺れ 静岡 剣持せつ子
 サングラスをさなじみと解るまで 安中 多胡恵美子
 平凡な一日過ぎゆく法師蟬 鎌倉 緒方 初美
 逃げ場無き運転中の雷鳴に 広島 尾首美知子
 別れきて独りの月をいく度も 高松 白根 純子
 新涼や眉のすんなり引ける朝 太宰府 川路 泰子
 虚子の世へ逝かれし御師沙羅の花 福山 森本美輪子
 原爆忌一と日涙の如き雨 札幌 岩本 京子
 庭歩く夫の大きな夏帽子 西予 武知 洋子
 富士山の星を褥に長き夜 静岡 堀谷 詠子
 いきなりの郭公迎へくれし寺 加賀 出島 達子
 秋蟬にありし裏声聴く夕 伊万里 田中 南嶽
 ありにけり京に浪速に鱧祭 吹田 生澤 瑛子

句座といふ夏負知らぬ人ばかり 大牟田 介弘 浩司
 月の出を待つや子の帰宅を待つや 尼崎 ほりもちか
 波の音闇に沈めて月見草 多摩 松井 秋尚
 もしやとは危ふき言葉露けき夜 西宮 宮本 露子
 秋日傘閉ぢて心を開きをり 伊賀 松村 咲子
 夜更しの癖のなほらぬ夜食かな 芦屋 鎌野 光子
 秋暑し暑しと地球の片隅で 東京 兎島 壽子
 早寝して夜長の夢の二度三度 金沢 村上 秀吾
 合掌に返す合掌露けき世 兵庫 今地千鶴子
 なほざりを詫びつつ硯洗ひけり 浜松 平澤 洋子
 子に聞え我にはきこえぬ昼の虫 長岡 安井 里子
 椅子一つ置いて良夜のバルコニー 市原 飯塚 咲子
 句会てふ心涼しき円居かな 石川 堀口 道子
 秋暑しさうは続かぬものとして 小樽 岩崎スイ子
 台風の去りまつ先に庭を掃く 西予 黒田 美穂

解く荷に母の涼しき便りかな 金沢 村本寿美枝

秋草の野へ続きたる滑走路 大阪 上西左大信

落蟬の低く放れば高く舞ひ 岡山 内田 一正

露の世の逢ふ約束のまた延びて 西予 渡辺 孝子

怒らせぬやうに逃せし放屁虫 名古屋 山口 勝行

風の盆中止も路地に胡弓の音 石川 駒形 隼男

秋一步進めて雨の上がりけり 糸島 占部ゆき江

露の世の宝としたり句の縁 神戸 長谷 元子

手のひらを返したやうな涼しさよ 青森 長島 喜美

結界の闇の深さよ虫の秋 大牟田 蓮尾美代子

見晴らせる墓地は涼風忌を修す 倉吉 吉田やす子

幸せに気づく幸せ敬老日 春日 志鶴 富生

もう雨を待つてはをれず大根蒔く 井原 片山 千代

針持てば女はやさし秋ともし 福岡 山口 裕子

爽やかに我に過ぎたる誉め言葉 熊本 吉田 潮

● 田中静龍選

特選五句

旅いくつ諦め海を見る晩夏 大牟田 介 弘 紀子

新涼や職場復帰の娘の白衣 金沢 三 島 由紀子

一人より集ふが楽しホ句の秋 山形 布 川 國 雄

口元の見えぬ会議や蚯蚓鳴く 刈谷 稲 垣 三千代

梅干の色裏返す真昼かな 浜田 田 中 由紀子

二句短評

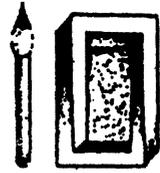
一句目——今年はコロナ禍の為に、国内外の旅行を中止することを余儀なくされた残念な気持ちは万人に共通できる出来事であった。海を見ながら次の旅の構想と疫病の終息に思いやる作者の心情が表現できた。
二句目——コロナ禍の患者を介護された医療関係者の皆様。特に最先端で働いた看護師の方々や、その家族の方も不安な日々であったであろう。療養の後、職場復帰する娘さんの無事を祈る親の心情が伝わって来る。

入選六十句

いち早く蝶現れし梅雨晴間	金沢 小幡 道子	手花火の終の雫を待つ静寂	高知 前田まこと
城山の木々の萎えたる残暑かな	浜田 福本 正巖	そのなかのひとりを見つめ盆踊	高松 岩田 賀代
稲妻に逃げるすべなき山歩き	姫路 黒田千賀子	風鈴の奏でてをりし風の唄	福山 貝原 玲子
新涼の川風潮の香をのせて	福岡 馬場 紀子	あきらめとやる気たたかふ極暑かな	宇佐 磯永喜八郎
禁漁の川落鮎に膨らめる	米原 成宮 伯水	秋蟬にありし裏声聴く夕	伊万里 田中 南嶽
日本語の乱れ叱りて生身魂	神戸 柏原 憲治	園児らの収穫を待つ芋畑	長崎 植村 華文
山上の闇の深さや星月夜	神戸 片岡 橙更	それとなく人と距離置き秋日傘	高松 久本 照代
酔ふほどに人恋しくて酔芙蓉	うきは 金子 清黙	独り居をホ句に生きよと法師蟬	福岡 吉田 文代
雨ぼつり夕立の迫る散居村	鳥原 西田比呂志	おのづから人と距離置く端居かな	阿南 田中 栄子
街騒のとぎれし刻の法師蟬	豊田 杉本 淑代	電柵に確と囲まる西瓜畑	伊賀 山村 勝子
佐比売野に結びて昨夜の星の露	香川 湯川 雅	滝音や至近の声も寄せつけず	長野 加藤 公男
緑蔭に来て句心を取り戻す	筑紫野 多田 蒼生	土用芽に生きる力をもらひけり	浜松 鈴木 浜子
人悼みをれば音たて桐一葉	長岡京 算 双子	釣竿に人の寄り来る秋の海	新潟 本間 百果
一村を掻き消す夕立なりしかな	八千代 向阪 由紀	ひと眠りして存分の夜長かな	高松 梶村 恭子
里山の裾野を広げ蕎麦の花	福島 坂野 洋三	一人居の静まる闇の鉦叩	大野城 稲岡とみ子

秋の海見詰めて思惟の腕解かず 高松 森本 添水
 秋暑しアクリル越しに話す日々 狭山 鈴木謙二郎
 アーケード出来て星なき星まつり 茨木 入江緋紗枝
 法師蟬城址の森を震はせて 伊勢崎 村上 節子
 巡礼の鈴の音零しゆく花野 西宮 山谷 彰子
 背伸びして再び始む夜なべかな 高松 荒井多美枝
 露けしや人の暮しの洩れ灯にも 筑紫野 宮田 良子
 紅白に分ち括りて萩の花 和歌山 市ノ瀬翔子
 触れずには通れぬ庭の萩白し 長岡 安原 葉
 城跡の木蔭煌めく露涼し 浜田 高村美都子
 木道を少し離れて吾亦紅 久留米 平岡 清志
 爽やかに身一つといふ施設入り 鳥原 八木 花栗
 露の世の宝としたり句の縁 神戸 長谷 元子
 新涼や夜明けを待ちて畑仕事 松江 岡坂 幸子
 秋の蚊帳遠き昭和の透けて見え 加吉川 瀧 積子

短夜や師への弔句のまとまらず 明石 駿河 亜希
 風止んで棚田に稲の花匂ふ 成田 小川 笙力
 酔芙蓉夜風の染むる裏通り 鳥田 川崎 文代
 鎮魂の花火打ち上げ球磨の夜 熊本 池原 倫子
 朝露を払ふ小犬のとばつちり 神戸 大西美紗子
 もう雨を待つてはをれず大根蒔く 井原 片山 千代
 一声にデッキに揃ふ月の友 大分 小山さち子
 爽やかな会釈ベンチの端と端 高崎 宮内 千早
 登城坂背を押す金風引き連れて 伊賀 福森志津子
 野面積垣の隙間へ穴まどひ 七尾 橋本紀美子
 一雨が一気に秋を近づける 浜田 三浦 健一
 永らへて卒寿の祝ひ胡蝶蘭 北海道 伊林美恵子
 露天湯に鯛の鳴く夕べかな 逗子 岡野 知子
 針持てば女はやさし秋ともし 福岡 山口 裕子
 ジグザグに目の追ひ付けぬあきつ飛ぶ 福岡 加藤とも子



編集後記

冬の日のうちかゝやきて眉にあり

虚子

よく人の目を見て話せと云われましたが、今年ほど人の目や眉を見て過ごしたことは無かったように思います。決意や気持ちはそこに表れますね。

句会やイベント、会議も満足に行えず、一年が過ぎようとしています。長かったような、あつという間のような何とも中途半端な一年でした。そんな

中で気持ちを明るくしてくれたのが青年部の存在です。

今月号から青年部メンバーによる「伝統俳句とは何か」をテーマにした評論の連載企画が始まりました。初回の筆者は青年部の提案者でもあり、会社勤めの合間を縫ってこの企画をまとめた功労者。会社ではオリンピック関連の仕事もしていると聞き、よくぞこの大変な時期に頑張ってくれていると感謝しかありません。また別のメンバーより、リモートによる「書くためのものの調べ方講座」を開催したいとの提案がありました。若い俳人の育成にも欠かせない講座だと自負していますが、なにせ事務局は相変わらずのアナログです。皆様のご協力と温かい応援を頂きたく、お願い申し上げます。令和三年の俳句カレンダーも順調にお手元に届いていると存じます。句会

が開催できず配布の難しさを実感いたしました。取りまとめの方には様々のご苦勞をおかけしていると存じます。この場を借りて御礼申し上げます。

(須川)

花鳥諷詠十二月号(通巻第三九三号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和二年十二月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一―一九二